2016年2月1日

司祭のてがみ

No.102

カトリック行橋小教区 ： 主任司祭　ベリオン・ルイ神父

「臨在の幕屋」を張りましょう。

＊「平和」「平和」と叫ぶだけでは、平和が実現するのではありません。―この地上では軍人墓地ほど、平和に満ちたところがありません。―「様々な国で激しい戦いが繰り返され、盲目的なテロ事件が頻繁に起こっているのにこのような皮肉を言うなんて」と思われる方がおられるでしょうが、冗談のつもりで以上の言葉を書いたのではありません。多少、挑発的に聞こえるこの言葉を契機にして、大切であると思うことに少し触れてみたいと思います。

―「平和」「平和」と叫ぶだけでは平和が訪れるのではないのと同じように、人生において人間としてキリスト者として私たちが直面していることに対してスローガンだけでは解決方法にはなりません。格好いいスローガンには魅力を感じたとしてもそれは表面的で、単純な発想で、問題を解決するには役に立たないと思います。個人的に、家庭を持つ者として、社会人としてイエスの共同体の一員として生きるに当たって、時には真剣に考えることが私たちに求められています。日々の慌ただしさに麻痺されず、世間で流行することに流されずしっかりした知識を得、福音に基づいた判断を下すことができるために、どうしても人の流れから離れ、自分のためだけの時間を作ることが必要だと思います。

＊出エジプト記の 33 章には実に興味深い話が記録されています。「モーセは一つの天幕を取って、宿営の外の遠く離れたところに張り、それを『臨在の幕屋』と名づけた。主に、伺いを立てる者は誰でも、宿営の外にある『臨在の幕屋』に行くのであった」と。（出エジプト記 33 章 7）

〒824-0006 行橋市門樋町８－５／TEL.0930-22-0805／FAX.22-0816／http://www.yukuhasi.catholic.ne.jp/

神がイスラエルの民と共におられる「しるし」としてモーセは幕屋を張り、神との出会いの場を設けるようにしました。もちろんそれは神が幕屋の中に閉じ込められたことを意味しているのではありません。それは神がいつも共においでになっていることをヘブライ人たちが認識するためでした。「臨在の幕屋」がやがてエルサレムの神殿に変わり、「聖堂」につながりました。

―しかし「臨在の幕屋」を「場所」として見る事にこだわらず、「時」として理解することの方が大切なことではないかと思います。神との出会いなしに、神の「思い」を知り、神の「思い」を日々の生活の中で実行することはできません。神のいつくしみに触れようとしなければ、どこまで周囲の人々に暖かい眼差しを注ぐことができるでしょうか。

―私たちの日常生活において、「臨在の幕屋」を張りましょう。イエスに倣って。福音書によるとイエスはしばしば「人里離れたところへ」退いたそうです。―

＊今年も灰の水曜日（2 月 10 日）をもって、私たちは四旬節に入り、即 13 日（土）と 14 日（日）黙想会に参加するように呼びかけられています。黙想会を「時」としての「臨在の幕屋」を張ることを考えていただけないでしょうか。「臨在の幕屋」が「外の離れた所」に張られていたように、黙想会に参加することは家を出て「外」に行き、忙しい生活から「離れる」ことを求めています。もちろん「離れる」ことは日常生活と縁のない世界へ逃げることを意味しているのではありません。

日々の気がかりなこと、不安やプレッシャーとなる予定表から「離れ」、携帯、スマートホン、パソコンなどからも「離れる」ように誘われている理由は、命の泉である主イエス･キリストに命の水を汲むことによって、新たに神の「思い」を認識し、日々の生活の中で一層神の「思い」に従って生きることができるためです。それは特にいつくしみの特別聖年に当たって人々の前で人々のためにイエスに倣って確実に神のいつくしみの顔になるためです。

＊このように考えてみるとわかるように、黙想会に参加することは義務やつとめを果たすことではなく、恵みの一時を感謝のうちに迎えることです。

―どうか皆さん、カレンダーにしるしをつけて、参加することができるように是非都合をつけてくださるようによろしくお願い致します。カレンダーを見ることも忘れないで…。

皆さんお待ちしています。